

ブルーストとラスキン

女中の仕事と芸術をめぐる

福田 桃子

はじめに

ジョン・ラスキンは、アナトール・フランスとならんで、『失われた時を求めて』に登場する作家ベルゴットの主なモデルだとされる¹。ラスキンの美学がブルーストにもたらした計り知れない影響をめぐる論考は数多いが²、労働者階級の人々の生活・労働環境について積極的に発言した社会思想家としてのラスキンがブルーストに与えた影響については見過ごされてきた。本論では、ラスキンとブルーストが召使いたちに向けたまなざしを軸に、その影響関係を見直してみたい。

1. 召使いをめぐる議論

1892年にポール・デジャルダンらによって発刊された『道徳的行動連盟の機関誌 Bulletin de l'Union pour l'action morale』は、ブルーストがラスキンの思想に傾倒したきっかけのひとつと考えられている³。特定の教条にしばられず、よりよき社会の実現のために自由に意見を交換できる場をめざした本誌では、「教育の自由」「子供の権利の尊重」（1900年4月1日号）、「宗教と学校」（1900年8月15日号）、「男子の教育における女性の役割」（1901年5月15日）など、とりわけ教育や人間の尊厳にかんする議論が多くなされていた。

¹ Jo Yoshida, « Genèse de la “relecture de Bergotte” dans *À la recherche du temps perdu* », *Étude de langue et littérature françaises* [Société Japonaise de Langue et Littérature Françaises], n° 36, 1980, pp. 114-131.

² Jean Autret, *L'Influence de Ruskin sur la vie, les idées et l'œuvre de Marcel Proust*, Giard, Droz, 1955; Jo Yoshida, « Proust contre Ruskin : la genèse des deux voyages dans la *Recherche* d'après des brouillons inédits », thèse de doctorat, Université de la Sorbonne, 1978, 2 volumes; Éri Wada, « Proust et la traduction : l'évolution stylistique et esthétique de Marcel Proust à travers la traduction des ouvrages de Ruskin », thèse de doctorat, Université de la Sorbonne, 1996.

³ Francine Goujon, « Desjardin (Paul-Louis) », dans *Dictionnaire Marcel Proust*, publié sous la direction d'Annick Bouillaguet et Brian G. Rogers, nouvelle édition revue et corrigée, Paris, Honoré Champion, 2014, p. 297.

召使いの不足やそのモラルの低下が問題になっていた世紀転換期において⁴、この機関誌でも議論がなされたことは不思議ではない。1899年5月1日号では、以下のような問題提起がなされている。

最近、誰かが私の前で言っていた。「大衆教育の発展にはあまり賛成できない。そのせいで、この国では召使いを見つけられなくなってきている。読み書きができるようになったから、若者はもう使用人になりたがらない！」読者の皆さんがこの発言をもとに考えたことを教えていただきたい。とりわけ、召使いが実際に探しにくくなっていると感じるか、この発言の主と同じ原因をみとめるか、喜ぶべきか嘆くべきなのかということ。嘆くならば、どのような対策を提示されるだろうか。そして、未来の社会における召使いについてどうお考えだろうか⁵。

次号にあたる5月15日号ではすでに、多くの反響があったことが報告されている。読者からの投書の紹介が11月1日号まで続いていることから、この話題への社会的関心の高さがうかがえる。その投書の多くは、召使いという職業をなくすこと、もしくは労働条件の改善を提案するものであった。11月1日号において、編者は約半年間に渡る投書の紹介のまとめとして、召使いに家庭を築く権利や、私的な空間、自由な時間をみとめて「奴隷制」のなごりを消そうと提案した上で、次のように結論付けている。

[...]もっともへりくだった性質の者からも、われわれはその信頼や献身を努力して得るべきである。個人に奉仕することの根底にあり、金銭では支払うことのできない自己犠牲 (le don de soi) に感謝すべきである⁶。

ここで指摘されているように、主人と召使いの関係は、金銭の対価としてサービスを受け取ることには還元することはできない。19世紀小説に目を向ければ、例えばバルザックの『ウジェニー・グランデ』や、フロベールの『純な心』で、主人の幸福や満足を第一に考える女中たちの献身が描かれるいっぽう、ゾラはブルジョワ家庭における主従関係の難しさを強調している⁷。

⁴ Anne Martin-Fugier, *La Place des bonnes*, Paris, Perrin, coll. « Tempus », 2004 [Éditions Grasset & Fasquelle, 1979], pp. 33-38, « La Crise de la domesticité ».

⁵ « À propos des domestiques » (article signé « H.P. »), *Bulletin de l'Union pour l'action morale*, 1^{er} mai 1899, pp. 143-144.

⁶ Henri Provin, « Résumé et conclusion », *Bulletin de l'Union pour l'action morale*, 1^{er} novembre 1899, pp. 47-48.

⁷ ゾラにおける女中については、寺嶋美雪「主人の沈黙、女中の哄笑：『ごった煮』におけるブルジョワの私生活」、『仏語仏文学研究』、東京大学仏語仏文学研究会、

1900年に出版されたオクターヴ・ミルボー『小間使いの日記』のなかで、召使いは「怪物じみた雑種人間」(un monstrueux hybride humain⁸)と定義されている。カミーユ・ド・サン＝クロワは、敵意に満ちた主従関係を描いたこの小説を評しながら、「『善良さ』と『召使い』は両立し得ない二語である⁹」と記している。

『ゲルマンのほう』で、ゲルマント家のアパートマンに引っ越してきた主人公一家は、他の階の召使いたちとの交流が原因でフランソワーズの性格が悪化していくさまを目の当たりにする。

フランソワーズの性格のこのような変化は避けられないものだったかもしれない。ある種の暮らしは、あまりにも異様であるがゆえにある種の欠陥を否応なく(fatalement)生み出してしまう。ヴェルサイユ宮殿で廷臣たちにかこまれた国王の生活はその典型で、ファラオやヴェネチア総督の生活と同様に奇怪だが、国王よりも廷臣たちの生活ははるかに奇怪である。召使いたちの暮らしはそれに輪をかけて途方もなく奇怪(d'une étrangeté plus monstrueuse)にちがいでなく、ただ習慣がわれわれの目からその点を覆い隠しているにすぎない¹⁰。

召使いの奇妙な生活様式が否応なく欠点を生み出すという記述は、『スワンの恋』にも見いだせる。オデットの過去について匿名の文書を受け取ったスワンは、周りのすべての人間を疑うようになった挙げ句、その忠実な召使いにまで疑いの目を向け、その階級差が理解しがたい行動を否応なく(fatalement)引き起こすと考えるに至る¹¹。『ゲルマンのほう』では、フランソワーズの性格の変化を分析しつつ、その原因は奇妙な生活様式だけでなく、主人の性格にもあることが指摘されている。

私が生来の変わらない欠点を自覚したのは、私の召使いたちが一様に身につけた欠点を通じてであり、彼らの性格はいわば私の性格のネガ(épreuve négative)を私に提示したのだ。かつて母と私は、サブラ夫人が召使いたちのことを「あの人種、あの種族」と言っていたのを、大いに馬鹿にしたものだった。しかし私がフランソワーズをほかの誰かに替えたいと思わなかったのは、その替わり

39号、2009年、59-83頁に詳しい。

⁸ Octave Mirbeau, *Le Journal d'une femme de chambre*, édition de Noël Arnaud, Paris, Gallimard, coll. « Folio », 1900, p. 203.

⁹ Camille de Sainte-Croix, « Octave Mirbeau : *Le Journal d'une femme de chambre* », *La Revue Blanche*, 1^{er} septembre 1900, p. 74.

¹⁰ Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu*, édition publiée sous la direction de Jean-Yves Tadié, Gallimard, 1987-1989, 4 volumes, t. II, p. 364 (RTP).

¹¹ RTP, t. I, p. 352.

の誰かにしたところで、召使い一般という人種と、私の召使いという特殊な種族に属する羽目になるだろうからだと言わねばなるまい¹²。

主人と召使いの性格についての考察は、ラスキンの著作にも見出せる。1865年の『デイリー・テレグラフ』誌上で、よい召使いを見つけることの困難をめぐる投書への反駁として、ラスキンは主人の側に反省を促している。

よい召使いをもつ手段はたった一つしかありません。それは、よく仕えられるにふさわしくあることです。あらゆる自然も人間も、よき主人には仕え、悪しき主人には抵抗するでしょう。そして、ひとつの国家の質をはかるためには、その召使いの質ほど確実な判断材料はありません。なぜなら召使いたちはその主人たちの影 (their masters' shadow) であり、主人たちの欠点を平らな面にのぼして強調するからです¹³。

召使いを主人たちの影 (their masters' shadow) になぞらえるラスキンの発想は、召使いの性格は主人の性格のネガ (épreuve négative) であるとするブルーストに通じている。ブルーストとラスキンにとって、召使いの欠点とは主人に自己反省を促す鏡である。

いっぽうでブルーストが、「召使い一般」という人種についても言及していることも忘れてはならないだろう。物語の節々で、フランソワーズの特定の行動や欠点はその社会階級にも由来するものとしても描かれている。たとえば、主人公の体調に対する女中の大げさな反応について、「このような嘆きは、私の健康状態よりも、彼女の『階級』に由来していた¹⁴」と分析している。また、主人公の叔父の召使いの甥であるモレルは、隠そうとする自らの出自から逃れられずにいる人物である。主人公はモレルから「こそそした召使い¹⁵」しか使わないであろう奇妙な言い回しを聞く。また、女性に対する倒錯した欲望をシャルリュスに打ち明けたあと、わざわざ言い換えるのは「召使いの遺伝的な用心深さ¹⁶」のためであるとされる。「[...] 父親の隷属状態から逃げ出したモレルは、概して横柄な馴れ馴れしさに喜びを見いだ

¹² RTP, t. II, pp. 364-365.

¹³ John Ruskin, « Letters on servants and houses » [1865], *Times and Tide with other writings on political economy 1860-1873*, *The Works of John Ruskin*, London, Library Edition, 1905, t. XVII, pp. 518-519.

¹⁴ RTP, t. I, p. 490.

¹⁵ RTP, t. III, p. 421.

¹⁶ *Ibid.*, p. 396.

すのだった¹⁷」というように、召使いとはかけ離れた態度をとろうとすることで、必死に否定しようとする出自はさらけ出されてしまう。

『見出された時』においては、モレルの態度と類似した問題がフランソワーズにかんして指摘されている。主人の私生活を覗き見たり、卑屈で馴れ馴れしい言葉遣いをする女中を前に、主人公は以下のように嘆く。

結局、われわれがもっとも好んでいる召使いたちは——彼らがもうわれわれにほとんど仕えることなく、仕事への敬意を見せないならなおさらのこと——ああ、結局は召使いにとどまり、彼らが我々のカーストにもっとも入り込んでいると思ひ込むほど、我々が消したいと思っている彼らのカーストの境界線をはっきりと露呈してしまうのだ[...]¹⁸。

「カースト」は、召使いの役割を放棄し、主人に対して敬意を欠くことでかえって明らかになってしまう。翻って、召使いが熱意をもって仕事をまっとうするとき——たとえばフランソワーズが料理の腕をふるうとき、彼女は「ミケランジェロ」にすら例えられている¹⁹——その「カースト」は軽々と乗り越えられていた。召使いを芸術家に例えるブルーストの感性はラスキンにも通じているのだが、両者の視点がいかに希有なものであったかは、19世紀における召使いの仕事および自己犠牲をめぐる言説との対比において浮かび上がってくるだろう。

2. キリスト教と女中

先に紹介した『道徳的行動連盟の機関誌』の召使いにかんする記事では、個人への奉仕の根底には、金銭では支払うことのできない自己犠牲 (*le don de soi*) があると述べられていた²⁰。召使いを雇うことが当然であった時代、キリスト教の教えや聖人たちの範例は、召使いたちの自己犠牲を正当化してきた²¹。聖書をひもとけば、ペトロの手紙には「召使いたちへの勧め」と題された項がある。

¹⁷ *Ibid.*, p. 301.

¹⁸ *RTP*, t. IV, p. 328.

¹⁹ *RTP*, t. I, p. 437.

²⁰ Henri Provin, « Résumé et conclusion », art. cité, pp. 47-48.

²¹ Anne Martin-Fugier, *op.cit.*, pp. 140-144.

召使いたち、心からおそれ敬って主人に従いなさい。善良で寛大な主人にだけでなく、無慈悲な主人にもそうしなさい。不当な苦しみを受けることになって、神がそうお望みだとわきまえて苦痛を耐えるなら、それは御心に適うことなのです。罪を犯して打ちたたかれ、それを耐え忍んでも、何の誉れになるでしょう。しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、これこそ神の御心に適うことです²²。

ペトロの教えは、主人の側にとってはどのような理不尽な仕打ちも正当化できる都合のよいものであった。19世紀には、この教えを体現するような召使いを模範として賞賛する教化本が多く出回っていた²³。とりわけ模範的な召使いとして頻繁に登場するのは、聖ジータと呼ばれるルッカの13世紀の召使いである。この召使いは『聖人行伝』では次のように紹介されている。

家に仕える他の召使いたちは彼女（聖ジータ）の敬虔さを嫌悪し、あらゆる類いの屈辱を与えたが、神の女中はやさしさと諦念をもってそれに耐えた²⁴。

周囲の人間たちから屈辱を受けてもただ耐える聖ジータに対し、神は寛容である。聖ジータが教会で夢中になって祈っていると日が昇っており、パンを焼くのが間に合わなくなった折には、天使がかわりに仕事をしてくれたことなど、さまざまな奇跡が紹介される²⁵。

1882年、ラスキンはフィレンツェ旅行に出向いた折、フランチェスカ・アレクサンダーという若い女性と出会う。彼女はトスカナ地方に伝わるバラードの歌詞を蒐集して挿絵を描いており、その才能を評価したラスキンは1885年に自ら解説を執筆した上で『トスカナの路傍の歌』として出版する。フランチェスカが蒐集した「聖ジータのバラード」について解説する折に、ラスキンはこの聖人の生涯についても記しているが、『聖人行伝』などで語られる伝説を踏襲することはない。ラスキンは強調するのは、聖ジータが半世紀の間同じ主人に仕えても何の奇跡も起こさず、ただまわりの人間に安らぎを与えていたことであり、この女中の生涯に神の介在する余地をなくしている²⁶。解説の末尾には、アナトール・フランスの『シルヴェストル・ボナ

²² 「ペトロの手紙一」第2節、『新約聖書』、新共同訳、日本聖書協会、1987年、431頁。

²³ Anne Martin-Fugier, *op.cit.*, pp. 140-144.

²⁴ Paul Guérin, *Les petits Bollandistes : Vies des saints*, 7^e édition revue et corrigée et considérablement augmentée (3^e tirage), Paris, Bloud et Barral, 1876, t. V, p. 49.

²⁵ *Ibid.*, p. 50.

²⁶ John Ruskin, « Notes on the life of Santa Zita », *Roadside songs of Tuscany*, *Studies of*

ールの罪』の一節を、あまりにも美しいからという理由でフランス語の原文のまま引用している。ラスキンが引用するのは、シルヴェストル・ボナールが、初恋の女性の娘ジャンヌを家に引き取るようになった折に、若い娘に対し、年老いた女中を敬いつつも従えるための心得を説く言葉である。

「ジャンヌよ、お聞きなさい。ここまであなたは私の家政婦 (*gouvernante*) とうまくやってきました。彼女は、年老いた人が皆そうであるように、根が気難しい。彼女をいたわってやりなさい。私自身も、彼女をいたわり、その不機嫌にも耐えねばと思ってきました。ジャンヌよ、彼女を尊重しなさい。そうは言っても、彼女が私の、そしてあなたの女中 (*servante*) であるということは忘れてはいないし、彼女も忘れてはいません。しかしあなたはその高齢と、高貴な心を敬うべきです。彼女は謙虚な人で、長い間善くあろうと努力し、頑になりました。そのまっすぐな魂の硬さを受け入れなさい。命令できるようになりなさい。彼女は従うでしょう[...]」²⁷。」

聖ジータにまつわる奇跡をみとめないだけでなく、従順な召使いとは対極にある女中が登場する『シルヴェストル・ボナールの罪』を引用してこの解説が締めくくられていることは興味深い。60年もの間正直に仕えてきたことを誇りにしているテレーズが、身の回りのことを何もできない老学者に対してとる態度はへりくだったものとはほど遠く、主人の威厳のゆらぎがこの作品のユーモラスな側面をもたらしている。そのいっぽうで、アナトール・フランスは召使いとその主人の関係がいかにあるべきかを、登場人物の言葉を通して真摯に語っている。テレーズにかんして、独身者の身の回りの世話をする家政婦 (*gouvernante*) と家事労働に雇われた女中 (*servante*) の両方の語が使われていることから、家政を司りつつも服従する立場であるという曖昧さに作者が着目していたことが分かる²⁸。

アナトール・フランスの他者に対する思索を凝縮したかのような一節をもって、聖なる女中についての解説を終えることは、ラスキンが召使いの献身を理想化することなく、いかに彼らの生を尊重すべきかを真摯に考えていたことの証左である。

peasant life, The Works of John Ruskin, London, Library Edition, 1907, t. XXXII, p. 79.

²⁷ Anatole France, *Le Crime de Sylvestre Bonnard, Œuvres*, t. I, pp. 298-299, cité par John Ruskin, « Notes on the life of Santa Zita », *Roadside songs of Tuscany, op.cit.*, p. 79.

²⁸ 『ゲルマントのほう』では、フランソワーズは料理女 (*cuisinière*) として扱われると顔をしかめ、彼女を家政婦 (*gouvernante*) と呼ぶ従僕をひいきにしていることが語られる(*RTP*, t. II, pp. 324-325)。

3. 『ジュヌヴィエーヴ』をめぐって

ラルマチヌが1850年に『ル・コンスティテュシヨネル』誌に発表し、翌年出版された『ジュヌヴィエーヴ』の主人公は、まさにペトロの教えを体現したかのような女中である。ポール・ベニシューによれば、1830年代以降のラルマチヌは、地上の苦難は人間を清めようとする神の思し召しだと見なしており、犠牲と諦念の物語である『ジュヌヴィエーヴ』はその典型的な作品である²⁹。ラルマチヌは友人達に「キリスト教は奴隷たちの宗教だ³⁰」とすら語っていた。

主人公ジュヌヴィエーヴは、病気がちな母にかわって女中のように家事を行い、妹のために自分の結婚を犠牲にする。妹を失い、数々の不幸が重なった末に、かつての婚約者とその妻の女中となり、彼らが疫病で没したのちに神父に仕える。神父の死後は、村に建てられた小屋で、女中を雇うこともできないすべての病人たちに仕える。

良質の読み物が貧しい人々に届くようにと、平易な言葉を使い廉価に設定されたこの小説は、フロベールやバルベール・ドールヴィイから強い批判を受けた³¹。カトリック信者であった後者をとりわけ憤らせたのは、「女中の祈り」と題された部分である。

神様、私たちが穏やかな従属を見だし、それを神様が私たちをこの世界に送り出したときに皆に与えてくださった条件として、不満なく受け入れられるようにどうかお助けください。[...]私の身分の義務と、罰と、慰めをお教えてください、そして、この世で人々のよき女中であった後、あの世で完璧な主人の幸せな女中にしてください!³²

バルベール・ドールヴィイが、「偽の憐憫」であり、カトリックの精神など見いだせない危険なものだと批判したこの祈りは³³、出版から半世紀近く経っても忘れ去られることはなかった。『道徳的行動連盟の機関誌』の1895年11月15日号には、このテキストがシュリ・プリュドムの詩「衰弱と疑念」とともに掲載されている。この2編のテキストは説明なしに引用されており、

²⁹ Paul Bénichou, *Les Mages romantiques*, Paris, Gallimard, 1988, pp. 67-68.

³⁰ Charles Alexandre, *Souvenirs sur Lamartine* par son secrétaire, cité par Paul Bénichou, *op.cit.*, p. 66.

³¹ Pierre Emmanuel, « La Culture et le peuple », dans Alphonse de Lamartine, *Geneviève*, introduction de Pierre Emmanuel, Paris, Vialetay, 1972, p. V.

³² *Ibid.*, pp. 227-228.

³³ Pierre Emmanuel, art. cité, p. V.

編者の意図は不明であるが、労働者たちの劣悪な生活環境を気にかけていたプリュドムは、貧しい人々を描くラマルチーヌの言葉に共感を示していた³⁴。1886年7月7日にラマルチーヌの像が建てられた際には、プリュドムが演説を行い、そこで『ジュヌヴィエーヴ』に描かれた「貧しい人々への理想的な思いやり」を賞賛している³⁵。『道徳的行動連盟の機関誌』を購読し、「女中の祈り」を何度か目にするようになるプルーストもまた、ラマルチーヌの「理想的な思いやり」を感じ取っただろうか？

「女中の祈り」は、プルーストとモーリス・バレスとのやりとりのなかでも重要な役割を果たすことになる。ラマルチーヌに深い関心を抱き、「ユゴーとラマルチーヌは教会である³⁶」とすら記したバレスは、アンナ・ド・ノアイユをはじめ、交流のあった人々にこの詩人を読むことを強く薦めていた³⁷。

プルーストは、1903年に『アミアンの聖書』の翻訳を終えた。その序文で、バレスの著作のヴェネチアにかんする章にラスキンへの言及がないことへの不満を漏らしている。

なぜバレス氏は、最新の著作のすばらしい章のなかで、ヴェネチアの理想の元老院を選ぶ際、ラスキンを省いたのか？レオポルド・ロベールやテオフィル・ゴージェよりもそこにふさわしく、パイロンとバレス、ゲーテとシャトブリアンの間にふさわしかったのではなからうか？³⁸

ラスキンを評価していなかったバレスは、プルーストの指摘への応答として、偉大さの序列を理解するために「女中たちの祈り³⁹」を読むようにという言葉を添えた上で⁴⁰、『ジュヌヴィエーヴ』を贈呈する。プルーストはバレスからの助言に対し、以下のように返信している。

³⁴ Pierre Flottes, *Sully-Prudhomme et sa pensée*, Paris, Perrin et Cie, 1930, pp. 51-61.

³⁵ Sully Prudhomme, *Inauguration de la statue de Lamartine, 7 juillet 1886*, Paris, Imprimerie de Firmin-Didot et Cie, 1886, pp. 7-8.

³⁶ Maurice Barrès, *Mes Cahiers, L'Œuvre de Maurice Barrès*, annotée par Philippe Barrès, Paris, Club de l'Honnête homme, 1969, t. XVIII, p. 4.

³⁷ Anna de Noailles, « Hommage de la comtesse Noailles pour le monument de Maurice Barrès », *Le Figaro*, le 24 décembre 1926, repris dans *Correspondance 1901-1923*, édition établie, présentée et annotée par Claude Mignot-Ogliastri, Paris, L'Inventaire, 1994, p. 799.

³⁸ *La Bible d'Amiens*, 4^{ème} partie de la préface, cité par Philip Kolb, dans Marcel Proust, *Correspondance*, édition de Philip Kolb, Paris, Plon, 1971-1993, 21 volumes, t. III, pp. 375-376 (*Corr.*).

³⁹ ラマルチーヌは「女中たちの祈り」ではなく「女中の祈り」と題している。

⁴⁰ *Corr.*, t. III, p. 375, Maurice Barrès à Marcel Proust [peu après le 16 juillet 1903].

まさに、私は「女中たちの祈り」（私はこれを知っていたことに今気がつきました）とあなたによる数多くの頁に、いかなる距離も「偉大さの序列」も見いだせず、あなたが『ジュヌヴィエーヴ』を送ってくださったことは、もし年代的に可能であったなら、『血と快樂と死』が『ジュヌヴィエーヴ』の作者から送られることと同じくらい私には尊いことでしょう。[...]あなたの書いた数多の頁は「女中たちの祈り」よりも優れています。[...]あなたの作品を読むことにはラマルチヌやシャトープリアンを読むことに劣らない喜びを見いだすことができます⁴¹。

プルーストがラマルチヌのテキストを「もう知っていた」と記しているのは、『道徳的行動連盟の機関誌』を読んだ記憶かもしれない。プルーストはバレスの作品を賞賛しながら、バレスが送付する労をとってまで勧めた『ジュヌヴィエーヴ』に関してコメントすることを周到に避けている。『ジュヌヴィエーヴ』に関してバレスとの書簡以外には言及が見られないことから、この作品はバレスが望んでいたような感銘をプルーストにはもたらさなかったと推測される。あらゆる苦難を諦念とともに受け入れる女中の物語である『ジュヌヴィエーヴ』をめぐるバレスとプルーストのかみ合わないやりとりからは、ふたりの作家の根本的な齟齬を読み取ることができる。

4. 女中の仕事へのまなざし

ラスキンはその著作のなかで、生涯をラスキン一家に捧げた老女中アンについて幾度も言及している。プルーストがトルストイについて書き残した断章からは、プルーストがこうした記述に関心をもっていったことが伺える。

至高の知性が結局は機知に、しばしばわれわれの内にある機知にどれほど密着しているかを見届けるのは楽しいことだ（飼い犬ワイサーや女中アンに対するラスキンの揶揄、アンナ・カレーニナの冒頭の基調をなすトルストイの揶揄）⁴²。

『アンナ・カレーニナ』の冒頭では、夫の浮気が露見した家庭で、妻は泣き、召使いたちに指示を出す者もなく家が機能しなくなった様子がユーモラスに描かれている。プルーストは、ラスキンにかんする断章のなかでも、トルス

⁴¹ *Corr.*, t. IV, pp. 425-426, à Maurice Barrès [peu après le 16 juillet 1903].

⁴² Marcel Proust, *Contre Sainte-Beuve*, précédé de *Pastiches et mélanges* et suivi de *Essais et articles*, édition de Pierre Clarac et Yves Sandre, Paris, Gallimard, coll. « Pléiade », 1971, p 658 (CSB).

トイとラスキンを「良心を司る者」として揃って挙げており⁴³、ふたりの作家に通底する精神を見いだしていたことがわかる。上記の引用でトルストイのユーモラスな描写と並列されたラスキンによる女中アンやワイサーについての描写は、つねに相手への深い洞察に基づいていた。

アンはラスキンの父の代から乳母・女中としてラスキン家に一生を捧げた人物である。1885年から1889年にかけて執筆が続けられた未完の自伝『プラエテリタ』は、ブルーストがゲーテの『詩と真実』と並び評するほど高く評価していた書物であるが⁴⁴、ラスキンはこの自伝のなかで、両親に次いで懐かしく思う人物としてアンの名前を挙げている⁴⁵。

ラスキンのアンへの想いを、ブルーストはレンブラントをめぐる文章のなかに反映させている。1898年あるいは1900年に執筆されたと推測されるこのエッセイのなかで⁴⁶、ブルーストは1898年にアムステルダムに赴いて鑑賞したレンブラント展について書いているのだが、ここでラスキンは老女中を伴って登場する。

アムステルダムのレンブラント展に赴いて、長い巻き毛の老人が、足取りもあやしく、くすんだ目をして、美しい顔にもかかわらず呆然とした様子で、年若い女中とともに入ってくるのを見た⁴⁷。

1900年に没したラスキンの最後の外国滞在が1888年まで遡ることを鑑みれば、このエピソードはブルーストによる創作である⁴⁸。また、ラスキンの父の乳母でもあった老女中アンは、前述の『プラエテリタ』が執筆されている時点ですでに没していることをラスキン自身が語っている⁴⁹。現実にはラスキンよりもはるかに年上であったアンは、ブルーストの想像力のなかでは、その主人が歩くのも覚束ない年齢になっても彼に寄り添っており、『失われた時を求めて』の最後で、長い時を経ても主人公の創作活動を見守るフランソワーズを予告しているかのようだ。

⁴³ *Ibid.*, p. 439.

⁴⁴ *Ibid.*

⁴⁵ John Ruskin, *Praeterita, The Works of John Ruskin*, London, Library Edition, 1908, t. XXXV, p. 30.

⁴⁶ Kazuyoshi Yoshikawa, *Proust et l'art pictural*, Paris, Honoré Champion, coll. « Recherches proustiennes », 2010, p. 99.

⁴⁷ *CSB*, p. 662.

⁴⁸ Kazuyoshi Yoshikawa, *op.cit.*, p. 98.

⁴⁹ John Ruskin, *Praeterita, op.cit.*, p. 30.

この断章の最後で、プルーストはもういちどラスキンの女中に言及している。

彼の女中は、他の老人をトランプ遊びの見学に連れて行くか、あるいはぶどうを一房与えるかのように、彼をレンブラントの絵のところ連れて行っただろう。われわれの親しい人々は、いつでもわれわれの好きなものを知っているのだから。それにいかめしい名前 (*noms augustes*) が、理解されることなく親しい唇 (*bouches familières*) から発音されるのは、しばしばわれわれの顔をほころぼせる。それはわれわれの趣味が、より現実の近くにいる人たちに扱われることでより現実味を帯びる嬉しさからだ⁵⁰。

いかめしい名前(*noms augustes*)を親しい唇 (*bouches familières*) で発音することで、女中は知的な世界と現実の世界をつなぐ存在となる。『ジャン・サントゥイユ』に登場するブーリエ氏の女中マリエットも、同様の役割を果たしており、ここではスピノザの名は、彼女にとって「いかめしい」と同時に「親しい」ものとして描かれている。マリエットの頭のなかでは、「竈、洗濯物、スープといったとりとめもない言葉の隣に、より高貴ではあっても彼女にとっては同じくらい日常的な、プラトン、ヘーゲル、ドゥニ・ダリカリナスといった語⁵¹」が並んでいる。

このように、ブーリエ先生はいつも、「マリエット、『ノヴム・オルガヌム』を。マリエット、『純粹理性批判』を」というのだった。そして、火をおこそうとしている薪の前でひざまずいているとき、ブーリエ先生がコーヒーを飲み終える間に説明を求める朝の生徒が、彼女にとっていかめしくも親しいスピノザの名前 (*le nom auguste mais familier pour elle de Spinoza*) を口にするのを聞いたならば、立ち上がることなく、火をおこすのをやめて、先生に尋ねるのだ。「旦那様は『エチカ』がご入り用で？」⁵²

主人が携わっている芸術や知の世界は、彼に仕える女中にとって手の届かないものではなく、日常生活に溶け込んだ身近なものである。例えその意味がわからなくとも言葉を口にし、書物を手にとるという形で、主人と女中の世界が相互に浸透することにプルーストはこだわっていた。知的な活動や創作活動に携わる人間にとって、その近くにいる女中は、日常の雑用をこなす以

⁵⁰ CSB, p. 664.

⁵¹ Marcel Proust, *Jean Santeuil*, précédé de *Les Plaisirs et les jours*, édition de Pierre Clarac et Yves Sandre, Paris, Gallimard, coll. « Pléiade », 1971, pp. 265-266 (JS).

⁵² *Ibid.*, p. 266.

上の存在であり、日常生活と精神的な世界の触媒であるとブルーストは考えていたようだ。

「イギリスの労働者・勤労者への手紙」という副題が付され、ラスキンが労働階級の人々に宛てた 86 通の書簡の形をとったエッセイである『フォルス・クラヴィゲラ』では、女中アンにかんするエピソードがいくつか語られている。1907 年に出版されたこの書物について、ブルーストは 1908 年にレーナルド・アーン宛ての手紙で言及している⁵³。「女中たちの賃金」と題された第 28 通目の手紙には、アンの性格について次のような記述がみられる。

[...] 哀れなアンはその生涯のあいだずっと、実にへりくだった心でいた。15 歳から 72 歳までずっと、彼女は自分ではなく他の人々の欲することをを行い、彼女自身のためではなく他の人々のために役立つとつとめてきたのだ⁵⁴。

ラスキンは、生涯を主人一家に尽くすために捧げた女中の生のあり方に敬意を払い、その献身を当然のことだとはまったく考えていなかった。

同じ手紙のなかでは、ラスキンに仕える他の召使いたちについても言及がなされている。

わたしは申し分なく暖かい部屋で快適に執筆をしている。私の召使いの何人かが、寒い中五時半に起きて準備をしてくれたのだ。数日前には、ほかの者たちがダラムの近くで、私のために命がけで石炭を掘ってくれた⁵⁵。

ラスキンは、自身をふくめた裕福な人間の生活の快適さが、どれだけの労働力に支えられたものであるかについて非常に意識的であった。ラスキン家に仕えることに一生を捧げた女中アンに関しては、その自己犠牲だけでなく、仕事にまつわる誇りや喜びにも言及がなされている。第 53 通目の手紙には、パンケーキを作るのがならわしの「告解の火曜日」におけるアンの活躍が綴られている。

[...]告解の火曜日には、われわれは主にパンケーキの準備で慌ただしかった——私の乳母アンは、その日あらゆる点で料理人を凌駕していた。彼女がパンケー

⁵³ *Corr.*, t. VIII, pp. 253-254, à Reynaldo Hahn [le samedi 24 octobre 1908].

⁵⁴ John Ruskin, « Servants' wages » [1873], *Fors Clavigera, Letters 1-36, The Works of John Ruskin*, London, Library Edition, 1907, t. XXVII, p. 518.

⁵⁵ *Ibid.*

キをとりわけ滋養のある狐色にする技 (art)、ひっくりかえす手際のよさは、真似のできないものだと思われていた⁵⁶。

ここでの「技 art」は、単なる手先の器用さだけでなく、料理人をも凌駕し、誰にも真似することのできないアンだけの個性が読み取れる点で、「芸術」でもある。

ブルーストもまた、『花咲く乙女たちのかげに』でのノルボワ氏来訪のエピソードにおいて、フランソワーズの料理の芸術的側面を強調している。

そしてフランソワーズは、前日から、彼女が確かな才能に恵まれている料理の芸術に没頭できるよろこびに浸り、新たな来客の知らせにも刺激され、彼女だけが知っている方法でブフ・ア・ラ・ジュレをつくらなければいけないと意気込みながら、創造の熱狂のなかに生きていた⁵⁷。

ラスキンと同様、女中の料理の才を強調した上で、ブルーストはその芸術的側面をさらに際立たせるために、その創造の熱狂を強調し、彼女が市場に赴いて肉を選ぶようすは「ユリウス二世の記念碑のためにもっとも完璧な大理石の塊を選ぶためにカルラーラの山中で8ヶ月を過ごしたミケランジェロ⁵⁸」に例えられている。

ラスキンがアンの仕事に芸術に匹敵するような「技」を見いだすのは、料理の場面だけではない。第 56 通目の手紙には、荷造りの場面で活躍する女中の様子が描かれている。

申し分のない正確さは、彼女の技 (art) におけるちょっとした機知 (wit) や創造力 (invention) を意味していた⁵⁹。

ここではさらに、技だけでなく、機知や創造力といった語を用いることで、その独創性も強調されている。

第 28 番目の手紙で、ラスキンはアンの仕事の質の高さだけではなく、仕事をまっとうするときの誇りにも言及している。

⁵⁶ John Ruskin, « These be your gods » [1875], *Fors Clavigera. Letters 37-72, op.cit.*, p. 316.

⁵⁷ *RTP*, t. I, p. 437.

⁵⁸ *Ibid.*

⁵⁹ John Ruskin, « Time-honoured Lancaster » [1875], *Fors Clavigera. Letters 37-72, op.cit.*, p. 389.

少女時代から老年まで、アンの一生のすべての能力はわれわれに仕えるために捧げられた。彼女には不快なことをこなす天性の才能と特技があった。それはまず何より、病室での仕事だったから、われわれのうちの誰かが病気でない限り、彼女はすっかり満足してはいなかった⁶⁰。

ブルーストもまた、「フランソワーズの満足や機嫌のよさは、われわれが彼女に頼むことの難しさに比例していた⁶¹」と記し、アンと同じように困難な仕事を求める気質を強調している。とりわけ困難で辛い仕事を描かれるのは、『ゲルマンのほう』における祖母の病気の場面である。

フランソワーズは、徹夜も平気で、どんなに辛い仕事でもできるその能力で、私たち家族にたいへん力になってくれた。そして、幾晩も立ちっぱなしで過ごした彼女を、眠ってから15分でも呼び起こさなくてはならない場合でも、辛い仕事を世にも簡単なことのようにこなせるのがうれしくて、顔をしかめるところか、その顔には満足と謙遜の表情を浮かべていた⁶²。

そして祖母の病状がとても悪いときにこそ、フランソワーズの仕事は彼女にとっていっそう自分でやるべきものに思われた。正規の資格をもった彼女はこの特別公演の日々に、自分の役をくすねられたくなかったのだ⁶³。

フランソワーズは祖母に対して真摯な愛情を抱いているが、その死に先立つ看病の日々は、フランソワーズにとっては「特別公演」であり、そこで演じる役は誰にも奪われまいとするようすが描かれている。このような側面は、困難な仕事を好むあまり家族の誰かが病気でないかぎり満足することができないというアンと重なる。ラスキンが描写するアンの仕事の質の高さや、困難な仕事への指向は、フランソワーズの「芸術家」としての側面の着想源のひとつかもしれない。

また、ブルーストは、女中の謙遜 (*modestie*) が、仕事を達成することの幸福と誇りに由来することを強調する。それはラマルチーヌが描いた、理不尽な苦難をただ諦念とともに受け入れる女中ジュヌヴィエーヴとは対極にある女中像である。

⁶⁰ John Ruskin, « Servants' wages » [1873], *Fors Clavigera. Letters 1-36, op.cit.*, p. 517.

⁶¹ *RTP*, t. II, p. 249.

⁶² *Ibid.*, p. 617.

⁶³ *Ibid.*

5. 仕事と芸術

ブルーストは『アミアンの聖書』を、1903年に仕事中に倒れ、帰らぬ人となった父に捧げている。その序文では、ラスキンの中世キリスト教への情熱を、芸術の精神的な使命が明確であることと、職人の仕事に意味があったことに帰している。ラスキンは『ゴシックの本質』のなかで、中世の労働者と19世紀の労働者を比較し、同時代の社会がかつてなく不安定なのは、職人が仕事に歓びを見いだせず、仕事からパン以外のものを得られないことだと主張していた⁶⁴。中世の建築のなかに、そこに携わった労働者たちの自由な表現を読み取るラスキンは、労働の喜びを奪うものとして工業化に強く反対していた。『ゴシックの本質』の序文を執筆したウィリアム・モリスは、「芸術とは、人間の労働における喜びの表現である⁶⁵」と主張していた。

ラスキンは、召使いの仕事も、それが心からの敬意に基づいたものであれば高貴であると考えていた。

他の人間をたたえ、われわれの存在や生を託すことは隷属状態ではなく、しばしばそれはこの世でもっとも高貴な生き方である。卑しい敬意は無分別で利己的なものであるが、高貴な敬意は、分別があつて優しく、人間はこのような形で従うときももっとも高貴である⁶⁶。

ミス・アレクサンダーの仕事は、太陽の光のように真摯で純粋で、春に植物が育つような確固とした活力を備えた勤勉さがあり、愛する主人のためのよき召使いの仕事のように謙虚で滅私のものである⁶⁷。

『トスカーナの路傍の歌』としてその作品を出版したフランチェスカ・アレクサンダーの創作活動を召使いの仕事に例えることは、ラスキンにとっては自然な連想である。パンケーキ作りや荷造りといったアンの日常の仕事が、他人には真似できない技 (art) として描かれていたように、召使いの仕事は、創作活動に比してもまったく劣ったものではない。ラスキンにとっては、そこに心をこめ、喜びを見いだすことのできる仕事は等価なのである。

⁶⁴ John Ruskin, *La Nature du Gothique. Chapitre extrait des Pierre de Venise*, traduction de Mathilde de Crémieux revue par Franck Lemonde, Paris, Éditions du Sandre, 2012, p. 52.

⁶⁵ William Morris, préface au chapitre VI (« The Nature of Gothic »), repris dans John Ruskin, *Stones of Venice*, volume II, *The Works of John Ruskin*, 1904, t. X, p. 460.

⁶⁶ John Ruskin, *La Nature du Gothique. Chapitre extrait des Pierre de Venise*, op.cit., p. 54.

⁶⁷ John Ruskin, « The Editor's preface », *Roadside songs of Tuscany*, op.cit., p. 53.

フランソワーズの「芸術家」としての側面が、ラスキンの描く女中像に呼応していることはすでに見た。フランソワーズは、創造力が活かせる料理や、病人の看護のように困難な仕事だけでなく、日常の些細な仕事にも喜びを見いだしている。

フランソワーズは、アルベルチーナを連れてきて幸福そうだったが、骨折って私を喜ばせることに成功したときはいつもそうなのだった。しかしアルベルチーナ自身はその喜びには無関係で、次の日からフランソワーズは次のような深遠な言葉を言わずにはいられなかった。「旦那様はあのお嬢さんに会うべきではありません。彼女がどんな性格なのか私にはよく分かっています。彼女はきっとあなたを悲しませることになりますよ⁶⁸。」

嫌っているアルベルチーナと主人公の交際の手助けであっても、その仕事を達成すること自体には喜びが伴う。フランソワーズの心は謎めいたものとして描かれ、主人公がフランソワーズは自分を愛しているのか嫌っているのか分からないことに戸惑う場面もあるが⁶⁹、困難な仕事を達成することの喜びはどんな場面であれ否定されることがない。

『道徳的行動同盟の機関誌』において、シャルル・ジッドは、この機関誌でとりわけ多く取り上げられていたトルストイとラスキンを次のように対比させている。

ラスキンは、「手仕事でパンを稼がない階級がある国ではどんな宗教も道徳も不可能」だと述べた。トルストイが同じ教条を説いたことは知られているが、あの偉大なる農民にとって、仕事の典型とは労働者のそれで、額に汗する禁欲的な仕事、神の法の実現のことである。ラスキンにとって仕事の典型は芸術家のそれで、「希望と、感嘆と、愛によって」成る楽しい仕事であり、美しいものをともに生み出す共同体であり、労働 *labor* ではなく作品 *opus* である⁷⁰。

プルーストは、トルストイ『アンナ・カレーニナ』の冒頭と、ラスキンが女中アンについて語るときのユーモアを並べて賞賛していた。トルストイは、ラスキンを「心で考える非常に希な人物のひとり⁷¹」と評し、賛辞を惜しま

⁶⁸ RTP, t. III, p. 184.

⁶⁹ RTP, t. II, p. 366.

⁷⁰ Charles Gide, « Ruskin socialiste », *Bulletin de l'Union pour l'action morale*, 15 avril 1900, pp. 53-54. イタリックの強調はジッド自身による。

⁷¹ Leo Tolstóy, « An introduction to Ruskin's works » [1899], dans *Recollections and Essays*, translated with an introduction by Aylmen Maud, Oxford, Oxford University Press, 1946 [1937], p. 188.

なかった。このように両者の感性は通じるところが多かったものの、「仕事」のテーマについては、シャルル・ジッドが「労働」と「作品」と見事に要約したように、対極的なとらえ方がなされていた。ラスキンが「作品」としての仕事のあり方を見だしていたもともと身近な存在が、女中のアンであったことは、料理や荷造りの場面の描写から読み取ることができた。

アントワヌ・コンパニオンは、プルーストが生涯忠実であったラスキンの教えとは、イデオロギーでも美学でもなく、その規律の感覚であり、仕事への信念であったと指摘している⁷²。かつて晩年のラスキンを支えるアンの姿を描いたプルーストは、『失われた時を求めて』の主人公が長い逡巡を経て仕事に着手するときにも、傍らに年老いたフランソワーズを寄り添わせた。ラスキンは、一家に仕えて生涯を過ごした女中アンの献身に深く感謝するだけでなく、その能力にふさわしい仕事を渴望し、仕事を達成することの誇りや喜びを見抜いていた。フランソワーズは、仕事を達成することに幸福を見出し、日常の仕事を芸術作品の域にまで高めているという点で、プルーストがラスキンから受け継いだ仕事への信念を体現している。

⁷² Antoine Compagnon, « Introduction. À hue et à dia », John Ruskin, *Sésame et les lys*, traduction et notes de Marcel Proust, édition établie par Antoine Compagnon, Paris, Éditions Complexe, 1987, pp. 23-24.